

令和 3 年 6 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13463

研究課題名（和文）実用文書からみる日本語の史的展開 中世から近代

研究課題名（英文）Elucidation of the Historical transition of the Japanese language by using practical documents: from the Medieval to Modern Era

研究代表者

永澤 済 (Nagasawa, Itsuki)

名古屋大学・国際機構・准教授

研究者番号：50613882

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：実社会でやりとりされた文書を資料に、日本語の文法・語彙・文体の歴史の変遷を研究した。成果1点目として、中世訴訟文書等の解析により和化漢文（変体漢文）の文法体系の一端を解明した。また、後の漢文系文体への影響について考察した。2点目として、日本史学研究者の協力を得て、鎌倉幕府の判決（裁許状）150通に出現する全語のリスト化・意味記述を行い、テキストジャンル間の語彙交流解明の基礎を作った。3点目として、戦前の公文書口語化の実態を示す資料を発掘し、口語体創出の試行錯誤を、言語学ならびに思想の観点で明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

実用文書による日本語史研究は、これまで文学テキスト等を中心に行われてきた研究の資料的空白を埋める意義がある。例えば前近代の和化漢文は、独自に展開した面と、同時代の他ジャンル（仮名文学等）と共通して展開した面とをもち、一部は近代以降の日本語にも影響を与えているが（永澤2021）、ジャンル間の語彙・文法交流の実態は未解明である。また、和化漢文の文法体系は十分に解明されておらず、資料解読は経験的解釈法に依拠してきた部分が多い。文体史も未解明の点が多い。本研究ではそうした日本語史の空白の一部を埋めると同時に、日本語と中国漢文との言語接触の観点から、言語学一般にも資する知見を提供した。

研究成果の概要（英文）：Using practical documents in the Japanese society as materials, this project studied the historical transition of Japanese grammar, vocabulary, and writing style. As the first result, a part of the grammatical system of the Japanized Chinese writing was clarified by analyzing medieval court documents. In addition, the influence on the later Japanese writing style was considered. Second, with the cooperation of Japanese history researchers, all the words that appear in the 150 court documents of the Kamakura Shogunate were listed and meanings of which were described. They will be useful for elucidating vocabulary interactions among different text genres. Third, the pioneering attempts for colloquialization of official documents before WW II were studied from viewpoints of linguistics and thought.

研究分野：日本語史

キーワード：日本語史 和化漢文 変体漢文 古文書 裁許状 訴訟文書 口語 言文一致

1. 研究開始当初の背景

研究対象とする実用文書のうち「和化漢文」及びその訓読体で書かれた古文書、「仮名文書」は、古文書というジャンルの中で独自に展開した面と、同時代の他のジャンル(仮名文学、記録語等)と共通して展開した面の、両面をもつ日本語史の重要資料である。しかし、古文書の語彙・文法・文体については、近代に至る変遷過程も、他の文体との関係も未解明の部分が多い。佐藤進一『新版古文書学入門』によれば、「古文書学」を確立し発展させてきた日本史学においても、その語彙や文体の問題が正面から追究されることはなかった。本研究は、日本語学・言語学のみならず、日本史学等の他分野にも資するものである。

2. 研究の目的

実用文書を資料に日本語史の新たな側面を明らかにする。実用文書は一級資料ながら、日本語史研究での活用頻度が極めて少なかった。よって、研究手法・資料を開拓し、国内外の研究者と研究資源を共有する基盤を調える。また、古文書語彙をデータベース化し「古文書語彙辞典」の作成基盤を作る。以上をも前近代日本語が近代を経て現代日本語にどう展開したのかを考察する。

3. 研究の方法

前近代の訴訟文書等の調査により「和化漢文」の文法規則を記述した。「和化漢文」と中国漢文の文法や語彙との相違点を考察した。文書一点ずつの調査により古文書語彙のデータを収集してデータベース化し、語彙辞典の基盤を作った。

4. 研究成果

実社会でやりとりされた文書を資料に、日本語の文法・語彙・文体の歴史の変遷を研究した。成果1点目として、中世訴訟文書等の解析により和化漢文(変体漢文)の文法体系の一端を解明した。また、後の漢文系文体への影響について考察した。2点目として、日本史学研究者の協力を得て、鎌倉幕府の判決(裁許状)150通に出現する全語のリスト化・意味記述を行い、テキストジャンル間の語彙交流解明の基礎を作った。3点目として、戦前の公文書口語化の実態を示す資料を発掘し、口語体創出の試行錯誤を、言語学ならびに思想の観点で明らかにした。

実用文書による日本語史研究は、これまで文学テキスト等を中心に行われてきた研究の資料的空白を埋める意義がある。例えば前近代の和化漢文は、独自に展開した面と、同時代の他ジャンル(仮名文学等)と共通して展開した面とをもち、一部は近代以降の日本語にも影響を与えているが(永澤 2021)、ジャンル間の語彙・文法交流の実態は未解明である。また、和化漢文の文法体系は十分に解明されておらず、資料解読は経験的解釈法に依拠してきた部分が多い。文体史も未解明の点が多い。本研究ではそうした日本語史の空白の一部を埋めると同時に、日本語と中国漢文との言語接触の観点から、言語学一般にも資する知見を提供した。

永澤 済 (2021)「日本中世和化漢文における非使役「令」の機能」

(『言語研究』159, pp.37-68.)

概要:

中国漢文で助動詞「令」は使役を表すが、日本中世和化漢文では、独自の非使役用法が広範囲に使用される。この「令」の機能については統一的な結論が出ていない。本稿では、従来の意味中心の分析ではなく、構文機能に注目し、次の通り結論した。非使役「令」の機能は動詞マーカである。助詞や接辞を表し得ない和化漢文で、和語の軽動詞「する」を代替した。その起源は、「S 令 V」使役構文が他動詞文と意味的に隣接するケースにおいて、使役の意が後退し「令」が単なる動詞マーカと解釈されたものと推定される。Vには、意志行為、非意志現象、無生物主体の事象、形容詞まで幅広く立つ。先行研究で「令」は「致」との類似性が指摘されたが、「致」の後続語は意志行為に限られかつ名詞的性格にとどまる点で、機能は異なる。

永澤 済 (2021)「Xノタメニ」受身文の残存と衰退: 近現代コーパスからみる」

(『日本語文法』21-1, pp.21-37.)

概要:

行為者を「X ノタメニ」で標示する受身文(「シーザーはブルータス一味のために刺し殺された」)が近現代の日本語にみられる。これは古代以来、被害文脈に偏って出現する用法で、現代には衰退している。このタメニ行為者型受身文の衰退過程を、近現代コーパスを利用して調査した。併せて、周辺用法 因果型(「教理が学術のために破壊せられ」) 現象型(「大山脈も風雨のために削磨され」) 関係型(「木星は雲のために包まれ」)の推移も調査した。その結果、1920-1940年代に 行為者型 と 因果型 が大幅に減少し、この時期に「X ノタメニ」受身文が衰退したことが明らかになった。衰退要因として、ニュートラルな意味領域を広くカバーする「X ニヨッテ」受身文の使用が1800年代終わりから1900年代初頭にかけて急速に拡大したこととの相関が強く推定される。

永澤済(2020)「日本言語学史上の言文一致: 司法界における思想・実践との比較」

(長田俊樹(編)『日本語「起源」論の歴史と展望』,三省堂, pp.177-204.)

概要:

近代日本の諸方面で試みられた言文一致のなかで、言語学界と司法界における試行錯誤の過程と思想を考察した。言語学者たちは、「言」と「文」とをどう近づけるかに苦心し、文末形式・表記・「標準語」の選定と彫琢等の様々な観点から検討を繰り返した。一方で、司法界の目的はもっと現実的で、主眼は単なることばの平易化ではなく、「判決論理」を当事者にわかりやすく伝えることにあった。相手に「話して聞かせるように書く」との発想をうみ、それにより、非口語体では表面化しなかった判断主体(裁判所)の存在が前面に出たり(モダリティ形式の使用等) 当事者の主観的立場を示す表現が多用されるなど、読み手を強く意識したスタイルが出現した。同時に、口語化が裁判の威厳を損ねることのないよう、主文のスタイル(命令形使用の是非等)や、方言使用の可否などが議論されもした。

永澤済(2019)「生物の和名・俗名における意味拡張」

(森雄一・西村義樹・長谷川明香(編)『認知言語学を紡ぐ』,くろしお出版, pp.93-114.)

概要:

古来人間にとって身近な鳥類、魚貝類、昆虫、植物の素朴な名称を取り上げ、「有限のことば」をどう工面し活用するかという観点で考察した。魚の「オジサン」「ウシサワラ」、植物の「マルバサツキ」「ヒメリンゴ」、昆虫の「サムライアリ」「アゲハモドキ」等の多様な名称を、語構成・意味拡張のタイプにより分類し、多様性のなかに共通性が見いだせることを示した。まず、語構成のタイプにより「単独X型」「X+種属名型」「P(接頭辞)+種属名型」「種属名+S(接尾辞)型」に4分類した。さらにXの意味拡張のタイプにより、メタファー的命名、メトニミー的命名、およびその混合型の3種に下位分類した。また、Pには「ウシ」「クマ」「カラス」「サクラ」等、人間にとって身近な動植物の名が種属横断的に使用され接頭辞化していることなどを指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 永澤 済	4. 巻 159
2. 論文標題 日本中世和化漢文における非使役「令」の機能	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語研究	6. 最初と最後の頁 37～68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11435/gengo.159.0_37	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 永澤 済	4. 巻 21 (1)
2. 論文標題 「Xノタメニ」受身文の残存と衰退：近現代コーパスからみる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 21-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 永澤 済	4. 巻 39 (2)
2. 論文標題 語史 与党（野党）（【特集】コーパスによる語史と現代語誌）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 58-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 永澤 済	4. 巻 871
2. 論文標題 書評・安部清哉編『中世の語彙：武士と和漢混淆の時代（シリーズ 日本語の語彙 3）』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本歴史	6. 最初と最後の頁 102-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永澤 済	4. 巻 39 (2)
2. 論文標題 「与党（野党）」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 58-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永澤 済	4. 巻 14
2. 論文標題 壁をこえた法律家たち 近代口語化の実践	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 比較日本学教育研究センター研究年報	6. 最初と最後の頁 196-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永澤 済	4. 巻 38
2. 論文標題 判決口語化の模索 伝統と革新の間で [本文]	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京大学言語学論集	6. 最初と最後の頁 163-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永澤 済	4. 巻 38
2. 論文標題 判決口語化の模索 伝統と革新の間で [資料]	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 東京大学言語学論集電子版	6. 最初と最後の頁 e107-e117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 永澤 済
2. 発表標題 利用者からみる通時コーパス資料 離縁・離婚の他動詞用法を例に
3. 学会等名 国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」シンポジウム2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 永澤 済
2. 発表標題 「昭和・平成書き言葉コーパスにみる「ために（為）」行為者受身文の残存」
3. 学会等名 「昭和・平成書き言葉コーパスによる近現代日本語の実証的研究」研究発表会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 永澤 済
2. 発表標題 漢語動詞自他の特殊用法と変化
3. 学会等名 現代日本語学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 永澤 済
2. 発表標題 壁をこえた法律家たち 近代口語化の実践
3. 学会等名 第12回国際日本学コンソーシアム（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 長田 俊樹 (編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 360
3. 書名 日本語「起源」論の歴史と展望	

1. 著者名 永澤 済	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 未定
3. 書名 『日本言語学史上の言文一致』 / 長田 俊樹 (編) 『日本語の起源はどのように論じられてきたか 日本言語学史の光と影』 (仮)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------